夢の中にて。

超高機動俺

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、サーヴァントとキル姫が夢の中で出会ったならどのような反応をするのだろうか？授業中に思ってしまった事を書きなぐるだけのそんなお話。

目次

アルトリア　エクスカリバー ―― 1
ランスロット　アロンダイト ―― 6
オリオン　アルテミス ―― 16
クー・フーリン　ゲイボルグ ―― 29
エミヤ　ティルフィング ―― 40

アルトリア　エクスカリバー

「ここは・・・?カルデアでは無いようですが・・・」

見渡す限りの白い景色。それはカルデアから見た山上の雪景色ではない事は確かだった。何と言うか、この世に存在する場所でも、あの世に存在するような場所でもないと思った。

「おや、あれは・・・」

何か無いかと探していると、遠くに一つ人影が見える。ここの住人だろうか、それとも私と同じ、迷い人だろうか。彼女はその影へと歩いてゆく。

しばらく歩いているうちに、それは人だということが分かった。私と同じような金色で長い髪。女性だろうか?・・・カルデアには男とも女とも取れるような英霊が一定数いるので、あまり見た目では判断しないようにしている。

「すいません、そこの御人」

その言葉に反応したのか、こちらを振り返る。白い服装に麗しい顔立ち。間違いない、女性だ。

「申し訳ないが、ここが何処だか知っているのなら教えて頂きたい」

「すいません、私もここが一体なんなのか、把握できていないのです」
　申し訳なさそうに彼女は答えた。
「あぁ、マスターをお守りしなければならないのに・・・」
「マスター?貴女も召喚されたサーヴァントなのですか?」
　カルデアに彼女は、いや彼女じゃないにしろ、彼女とよく似ている人間は居なかった。ということは、私のマスターとは別の魔術師が居るのだろうか。まぁ本来の聖杯戦争ならばそれが普通で、さらに言えば、人理は守られたのだから、マスター以外の人間が英霊を召喚することはなんら不思議ではない。
　でも彼女からは予想もしない一言が帰ってきた。
「サーヴァント?召喚?それはいったい・・・」
　まさか、彼女は現代に生きる人なのだろうか。ならばあまりこの事は話さないほうが良いだろう。
「いいえ、お気になさらず」
　そして詮索をされない為に、すぐに話を変える。
「ところで、貴女は何処から来たのですか?」
　当たり障りの無い話題を投げかける。これは私のマスターがカルデアに来た英霊全てと親密な仲になるための手段だと教えてくれた物だ。

「何処から・・・ですか。出身はブリテンです。アーサー王物語をご存知ですか?信じられないとは思いますが、私はかのアーサー王の持っていた聖剣なのです」

笑顔で続ける。

「自己紹介をしていませんでしたね。私はエクスカリバー。皆が良く知る聖剣のキル姫なのです」

キル姫、という知らない単語が出てきたが、今はそんな事どうでもよい。彼女は私の剣、エクスカリバーだというのだ。

「どうしたのですか?そんなに動揺したような顔をして・・・」

「いえ、自分の剣が人で、さらにこんなに美しい人でありましたから、驚いてしまって」

「え・・・?では、まさか貴女は・・・!」

「私は、ブリテン王国の王であり、貴女の持ち主・・・いや、人に向かって持ち主というのもおかしな話だ。貴女とともに戦場を駆けた、アルトリア・ペンドラゴン・・・」

そう言うや否や、彼女が飛びついてきた。ほのかな人肌の温かみを感じる。

「あなたが、私の持ち主だったのですね・・・!会いたかったです。そして、謝りたかった」

彼女に触れたとき、あの時の事を思い出した。聖剣を抜いたときから始まった、王としての人生。最後に裏切りによって終わった人生を。

「・・・いいえ、謝る必要なんてありません。悪かったのは、私の王としての有り方なのだから」
「でも・・・!」
「そして私は、ある人と出会って変わった。だから、泣き止んでください、エクスカリバー。私の剣に涙は似合わない」
ハンカチを取り出し、彼女の涙を拭う。恥ずかしかったのか、顔が真っ赤になったが直ぐに笑顔に変わった。
「そうです。その笑顔、綺麗ですよ?」
そこから私たちは色々な話をした。私がお世話になった人々の話。私が出会った、私の鞘を持っていたマスターの話、世界を救うために戦った話。そのお返しにと、彼女からは私たちとは違う世界の話を聞いた。天文台に住む老人の話。彼女のマスターの女たらしっぷりの話。・・・余談だが、この話にはとっても共感を覚えていた。
そうこうしているうちに、体から金色の光が漏れ始める。それは、目の前の彼女にも。
「アルトリア、これは・・・」
「別れの合図のようなものですよ、エクスカリバー。心配する必要はありません」
「別れ、ですか・・・」
彼女は悲しい顔をする。だから私は、召喚の可能性を示唆した。

「もしかしたら、貴女の世界の召喚でも、私を呼べるかもしれません。そのときの私はきっと、この時の事を覚えていないでしょうが・・・」

手を差し出す。

「武器とその持ち主、という関係ではなく、長年連れ添った友人として共に戦わせてくださいね?」

その言葉は彼女にまた涙を誘わせた。でもその涙はきっと悲しいものではなかったはずだ。だって、私の差し出した手を笑顔で握ってくれたのだから。

「もちろんです。アルトリア、また会いましょうね、きっと・・・」

「ええ、いつかまた、きっと」

そうして、私たち二人は金色の光に溶けていく。

目覚めると、そこはカルデアの自室。

「どうやら、戻ってこれたようですね」

立て掛けてある約束された勝利の剣に目線を向ける。いつかまた、会えますよね、と。

ランスロット　アロンダイト

ランスロットは円卓最強と呼ばれた騎士である。しかし最強とはいえ完璧ではない。彼の女性関係はとてもだらしない。故に、マシュから、最低ですとか近寄らないでくださいとか厳しい言葉をよく受ける。

彼はそんなマシュとの関係に悩んでいるようだった。

「・・・はぁ」

彼は自室のパソコンの前に座りため息をつく。画面には『娘との付き合い方』と書かれている。

「娘、か」

私には息子が居た。その名はギャラハッド。聖杯探索を成功させた騎士であり、円卓の１３番目の席の呪いを跳ね除けた男。だが私は、彼を認めることが出来なかった。彼を見ていると、とても強い何かが私を押し潰そうとしてくるからだ。

そして私は、彼を認めることなく、彼とはもう二度と会うことは無かった。もう謝ることなど、父として接することなど無いとも思っていた。だが、どうやら私たちは数奇な運命を辿ったのだった。

うっすらと記憶している。あの最果ての砂漠で、マスターとマシュを相手に戦った事。そして、彼らと共に獅子達と戦った事。そのとき、私は確信した。ついに、謝る時が来たのだと。

ギャラハッドはマシュに自らの力を譲渡した。彼女の中に彼の霊基が見える。彼女はギャラハッド本人ではないが・・・それでも、なんとか謝りたかった。私の自己満足なのは分かっているのだが。

「おっと、もうこんな時間か」

時計は１２時を指している。マスターはもう眠る頃だろう。カルデアの資源問題は解決されたとは言え、夜遅くまで電気を消費するのはあまり良くないだろう。ダヴィンチ嬢から怒られてしまう。・・・やぶさかでもないと思ってしまった自分を呪いたい。

ベッドに横たわり、目を閉じる。

「む・・・?」

起きるとそこは、見覚えのある湖だった。幼少期から青年期までを湖の乙女と過ごした、あの湖。そこにはひたすらに剣を振るう一人の乙女。だが彼女は、この湖の乙女ではない事ははっきりと理解できた。私は、何故だか彼女に旧友のような親しみを覚えていた。

そういえば、何故私はここにいるのだろうか?先ほどまでカルデアで寝ていたはず

だったのだが。まぁいい、彼女が何か知っているかもしれない。ランスロットはゆっくりと静かに、修練の邪魔をしないように近づいていく。
「二百六十一、二百六十二ッ！」
「レディ、少し聞きたいことが・・・」
　彼女の肩に手を載せたその時。
「きゃあっ！」
「ぬおっ!?」
　剣が百八十度回転。ランスロットの腹の部分を掠め、軽い金属音が湖畔に響く。
「あ・・・すいません！お怪我は・・・？」
「いや、謝らなくていい。剣の修練中に邪魔をした私が悪かったよ」
　鎧が無ければ軽く斬れていたかもしれないなと思いつつも、目の前の女性に心配を掛けさせないように振舞う。
「君があまりに美しく剣を振るうので、すこし見惚れていたようだ」
　頭にある言葉がよぎる。お父さん、また女性を誑かしているのですか最低です。
「ぐっ・・・」
「本当に大丈夫ですか？顔色が優れませんが・・・」
「後悔しているだけだよ。私の手元に剣があれば、君と少し手合わせ出来たのにな、と

ね」

彼女の心配そうな言葉に笑顔で答える。すると彼女にも笑顔が伝わる。やはり女性は笑顔が良く似合う。

ところで、何故彼女がこの湖にいるのだろうか?彼女のような英霊は見たことも、聞いたことも無い。

「あの・・・失礼な事をお聞きしますが・・・」

「ん?あぁ、構わないよ」

「私たちって、何処かでお会いしました?貴方の事を見ていると、どうも他人とは思えなくて・・・」

「奇遇だね。私も君に何故だか、不思議な感情を持っている」

どうやら彼女も、私と同じ疑問を持っていたようだった。

「名前を聞いたら、互いに思い出すかもしれません」

「ふむ、いい案かもしれないな・・・」

咳払い。

「私の名前はランスロット。クラスは・・・どうかしたのかい?」

「ランス・・・ロット・・・?」

彼女は私の名前を聞いて止まってしまった。・・・もしかしたら私がいつか出会った

女性なのかもしれない。冷や汗をかきながら彼女の反応を待つ。
「こんな所で出会えるなんて・・・。私のもう一人の主人（マスター）」
　そう言うと彼女は膝を付く。
「ちょ、ちょっと待ってくれたまえ！私は君のマスターではないし・・・！」
「アロンダイト、私の名前はアロンダイトです！貴方と共に王と仕えた、貴方の剣です！」
　その言葉で一つの糸が紡がれる。
「君が・・・アロンダイト・・・。なるほど、だから・・・」
　あの不思議な感情は、我が剣への信頼。彼女は間違いなく、私の剣アロンダイトなのだ。
「会えてよかった。ランスロット卿」
「あぁ、私もだ。アロンダイト・・・いや、レディ・アロンダイト」
　彼女は私の剣であるとは言え、今は人。ならばレディと呼ぶのは必要な礼儀であろう。
「この前、エクスカリバーが言っていたのです。夢の中でアーサー王と出会ったと。もしかしたらと思っていましたが・・・」
「我が王も自らの剣と会っていたのか！」

あの方も話してくれればよいのに・・・と苦笑いする。そうだな、戻ったらこの事を話してみよう。

戻ったら、か・・・。そういえば、マシュとの付き合い方も考えねばならないな。年頃の女の子の気持ちは難しいが・・・。友人にそんな気持ちが分かる女性がいたらいいのにな。

「あの・・・どうかしましたか?」

そうだ、ここに居るじゃないか。信頼のおける仲の、年頃の女性が。

「アロンダイト、君に聞きたいのだが・・・」

「なんでしょうか?」

「年頃の生娘の喜ばし方を教えて欲しい」

「ハァッ!!」

「ぐふっ!」

迷い無くわき腹に剣をぶつけられた。

「そういうことですか。私はてっきりまた女性関係のいざこざかと」

「君もマシュみたいなことを言うんだな・・・イテテ」

あの後、事細かに訳を話した。ギャラハッドの力を受け取ったマシュという女性の話

と、彼女への接し方がわからないという事を。
　ちなみに彼女の剣の速さは、その一瞬だけ私のものよりも早かった。
「簡単ですよ。彼女がギャラハッド卿に似ているというのなら」
「簡単なのか？いつもお詫びの品を送っているのだが・・・」
「そんな逃げ腰だから、嫌われるのではないですか？謝りたいのならしっかりと面と向かってするべきです！」
　彼女の真剣な眼差し。あぁ、そういうことか。私は逃げていたんだな。・・・騎士でありながら、情けない事をしているものだ。マシュやギャラハッドが避けるのも、当然の事か。
「あぁ、わかったよ。アロンダイト、こんな相談に乗ってくれたこと、感謝する」
「いえ、貴方の剣として当然の事ですから。良い報告を、お待ちしています」
　突如、私たちの身体を光が包んだ。
「退去が始まったか。アロンダイト、これでお別れだ」
「そうですか・・・。名残惜しいですが、仕方ありません」
　ゆっくりと身体が薄くなり始めている。彼女も同じく、足元はもう見えない。
「また会えたなら、互いの事をゆっくりと語り合いたいものだ。特に君の、今の持ち主に会ってみたい」

「私も、マシュさんに会ってみたいものです」
「叶うと、良いな?」
「叶いますよ、きっと」
そのまま二人は、その湖を後にする。

後日、カルデアのマシュの私室にて。
「マシュ、居るかい?」
ドアを軽くノックし、彼女の名前を呼ぶ。すると彼女はいつものように礼儀良く返事をする。
「ランスロット卿ですか?今開けます」
ドアが開いて、いつもの姿の彼女が目に入る。さて、気合を入れよう。
「マシュ、今日は・・・その・・・いい天気、だな?」
「そうですね。山の上では珍しい、一つの雲も無い素晴らしい快晴です。でも何故そんな事を?」
マシュは不思議そうに首をかしげる。あぁ、だめだだめだ。今言わなければ、また同じだ。
「・・・謝りにきた。本来なら、ギャラハッドに直接謝るのが先であり、筋なのだろう

が・・・。」

彼女はそのままじっと、私の紡ぐ言葉に耳を傾ける。

「だが今は、君に。・・・本当にすまなかった。この通りだ」

頭を下げる。何秒経ったのだろうか。彼女の口が開いた。

「許しません」

・・・まぁ、そうだろうとは思っていた。しかし、心には来る物が・・・

「だってそれは、ギャラハッドさんに直接言うべき言葉です。私への言葉としては、間違っています」

分からなかった。もう、何も。だから私は、彼女に問う。

「申し訳ない、マシュ。私はこれ以上どうすれば良いのか分からない。だから、教えてほしい」

彼女はくすりと笑い、しょうがないお父さんですね、と私に耳打ちをする。

「・・・そうか、なるほど」

やっと理解できた。我ながら察しの悪い男だな。

咳払いをして、居住まいを正す。

「マシュ、私は・・・ギャラハッドの父親だ」

「そして、ギャラハッドは間違いなく、私の息子だ」

目の前の娘は笑顔で私の言葉に答える。
「私、マシュ・キリエライトはギャラハッド卿の力を借り受けた者として、貴方を許します」
マシュが求めていたのは、彼女への侘びではなく、ギャラハッドを息子と、はっきりと宣言するということだった。
「まったく、お父さんは察しが悪すぎますよ」
「返す言葉も無い・・・」
そういう彼女は少し怒ったように言うと、私の手を掴んだ。
「おっと、なんだい?」
「もうすぐ12時です、お父さん。一緒に昼食を食べましょう?」
「わかった。行こうか、マシュ」
「はい!」
手を引かれながら、ランスロットは思う。アロンダイトに感謝を、と。

オリオン　アルテミス

「じゃ、いってくるね～」
「おう」
やぁ、どうも。皆大好きオリベえです。ん？何故アルテミスが俺から離れて何処かに言ったのかって？どうやら女子会ってのがあるらしい。連れて行って欲しいなーとか言ってたらそのままロープで縛られちゃった。ていうかこの状況マスターに見られたらマズイっしょ。だって天井からぬいぐるみが吊られてるんだもの。何処ぞのホラー映画も真っ青だよ。・・・まぁ吊られてるの熊なんだけど。あ、鍵閉められた。
「どーしよっかなー」
暇だなーとロープをブンブン揺らして色々と考えるオリオンだったが、そんなぬいぐるみに悲劇が起こる。
プチンと、何かが切れる音がした。
「なぁ!?」
そのまま揺れの勢いのままに、熊が空を飛ぶ。
あぁ、星座になった時見たいだぁとか思いながら。

向かった先は、壁だった。
「ちょまっ・・・!ぷぎゅっ」
頭を強くぶつけた。よかった、どうやらこの綿の詰まった頭で壁自体は守られたようだ。
だが彼の意識はそのまま何処かへ飛んでいった。

「んー・・・?」
気づくとそこはさっきまでの、カルデアの私室ではなかった。身体を縛るロープも今は無い。
「もしかして、レイシフトでもしたのか?いやいや、そんなはず無いだろ、多分」
仕方ないので、森の中を一人で歩いていくことにした。

「へ〜え・・・まったく、ここ何処なんだ?」
ぬいぐるみはぼやいた。歩き疲れて木陰に座り込む。その姿は誰かが置き忘れたぬいぐるみのよう。

「はぁ・・・残念です」

ある夜の街、彼女はうな垂れながら道を行く。
「せっかく噂の歩くくまさんぬいぐるみが手に入ると思ったのですが・・・」
どうやらお目当ての物が手に入らなかった様子。そのまま彼女は、彼女が仕えるマスターの元へと帰っていく、はずだった。
「・・・?なんでしょう、あれ・・・」
何かが光っていた。それを拾い、眺めてみる。
「何か棒のような・・・きゃっ!?」
光は突如、彼女を呑みこみそのまま消えたのだった。

「ん?なんだ?」
座っていたら目の前が光りだした。
「おぉ!?もしかしてマスターが助けに来てくれたのか!いやーありがたい・・・ね?」
出てきたのは期待通りのマスター、ではなく、ライダースーツに身を包んだ一人の女性。凛々しくも美しいその姿に、色男（オリオン）が反応しないはずも無く。
「お姉さんお茶しなーい!!??」
無条件に、条件反射で彼女の谷間にフライハイ。この思い、届けぇ!!
「・・・」

右手で空中キャッチ。あぁ、思いは届きませんでした。しかもこのお姉さん、見た目は違えどなんだかあいつに似ているような・・・いや似てるわ、服の開き具合そっくりだわ。

「あの～、人違い・・・みたいだったので・・・この手離していただけるとありがたいんですけど・・・あ、痛い痛い！中身出ちゃうから離して！」

危険を感じたオリオンは逃げ出そうともがく、が彼女はそんな話を聞きやしなかった。なんせ彼女の手には『喋る！歩く！くまさん人形』があるのだから。握る力は強くなり、目は血走る。

「見つけました・・・！しかも今度は喋るくまさん・・・。良い品です！」

「タスケテー!!」

「酷い目にあった・・・」

「すいません・・・。まさか意思を持つぬいぐるみがいたとは・・・」

頭はくらくらするし、毛並みはもうボロボロだが問題はないです。

「しかし、ここは何処でしょう？見たことの無い場所ですが・・・」

「俺もだ。ここら一体俺ら以外だーれも居やしない。まるで特異点だな」

そんな二人に、はたまた突如として現れる黒い影。

「またか！女の子だといいなー！オリべぇ、いきまーす！」
「これは・・・！くまさん、止まって！」
影に突っ込むオリオン。見事に胸元をがっしり掴んだ！
だがそれは硬い胸板で、温かみも包容力もかけらも感じない板だった。不思議に思い、顔を確認する。もしかしたらまな板な美女かもしれないしね？
「え？何この牛頭」
「ミノタウロウスです、逃げ・・・！」
「ぷぎゃっ!!」
「くまさん！」
「助けどぅわぁぁぁぁぁ!!」
オリオンはミノタウロスに摘まれて、そのまま空に飛ばされた。
あれ、今日の俺、空飛びすぎじゃね？熊って空飛べたっけ？
「くまさん、逃げますので我慢してください！」
「ぶぇっ」
空中で彼女にキャッチされ、そのままその場を離れる。うん、デカイ。
「で、なんだあれ？」

「ミノタウロス、異族の一人ですが・・・知らないのですか？」
　あの場所から少し離れ、二人は話していた。
「ミノタウロスなぁ・・・。俺の見たことのあるミノタウロスとは違うんだよなぁ・・・」
「そうなんですか？」
「うん。アステリオスって言ってな、常に肩に女神様を乗っけてるんだがこれがまた数奇な運命でなぁ。俺の・・・長くなるから止めとくわ」
「え、そこまで言って話さないのですか。とても気になるんですけど」
「いやだって、もう来てるし」
「え？」
「南に２００ｍほど連れて行ってくれない？そこまで行けばあいつ倒せるからよ」
　そういってオリオンはうまく彼女の肩に飛び乗った。
「わかりましたけど・・・」
「ところでお姉さん、お名前聞いてなかったな。俺はオリオン、お姉さんは？」
「アルテミス。月の女神の弓のキラーズです」
「・・・ほー」
「どうかしましたか？」
「いやな、俺はつくづくアルテミスから離れられないんだなーと。おー怖い怖い」

「??私はあなたを見たことありませんが・・・」
「まぁ気にしないでくれ。さてアルテミス、何か俺でも使えそうな武器持ってない?」
「そのサイズの武器はさすがに・・・あ」
　アルテミスはポケットを探り出す。出てきたのはオリオンがいつの間にか無くしていた棍棒。
「あ、俺の!」
「オリオンさんの物でしたか。ではこれを」
　二人は森の中を駆けぬけながら、奴を倒すための算段を彼女に伝える。
「いいかアルテミス。チャンスは一回、脳天に直撃させろよ?」
「わかりました。しかしオリオンさん、一体離れて何を・・・」
「お前が直撃させやすい様に動くの。頼むよー」

　奴はもう既に彼女を捉えていた。そして彼女も、奴を捉えた。奴は真っ直ぐに、木々をなぎ倒しながら進んでくる。対して彼女は静かにその時を待つ。
「・・・そこっ!」
　木々の間に見えた、脳天へのラインを矢でなぞる。矢は真っ直ぐに敵へと飛んでいた。しかしそれは簡単にいくはずも無い。圧倒的な力の差。いとも容易く、奴の武器で

弾かれた。
「やはり戦闘力の違いが・・・」
「外したか。じゃ、行ってくるわ」
ぴょーんと、オリオンは、何度目だか分からない飛翔。
「ええ!?」
彼女が驚くのも当たり前だ。だって熊の人形が、自分の足で、凄いスピードで飛んでいったのだから。
「やったれぇ!!」
返してもらった棍棒でぶん殴る。その威力はスピードと相まって最強の力となっていた。さすがにミノタウロスとはいえ、さらに人形とはいえ一人の英霊の一撃、無傷で追われるはずも無いのは当然。バランスを崩し、膝をついた。
「今です!」
その時間は僅か一時の物。だが彼女の矢が届くには十分な時間。力の差、それは一つの行動で覆すことが出来る物。いくらミノタウロスが強大な敵とは言え、今のそれは動かぬ的。矢は脳天を貫いたのだった。
「やった・・・!って、この力・・・?」
彼女にスキルが宿った瞬間だった。ミノタウロスを倒したことで新たなスキルを手

に入れたのだ。

「おー、ようやったな。お疲れさん」

「・・・オリオンさん、どうして光っているのですか?」

戻ってきたその熊は、光に包まれていた。その光は英霊がその役目を終えるときに現れる物。つまりは退去の印。

「いやー、なんか俺帰ることになったみたいだわ」

「帰る場所があるんですか?この森の妖精なんだと・・・」

「俺妖精さんに見えてたの!?」

「だってたくさん飛んでましたし。光ってるとより妖精らしいので」

そういやそうだな、と納得。

「まぁ最後だ。なんかいろいろあったけども、ありがとな」

「待ってください。最後にお願いが一つ」

神妙な顔、彼は立ち止まる。

「私に、教えてください。私の持ち主の事、アルテミスの事を」

「え、うん。もしかして気になる?やめとけよー、ガッカリするだけだぞ?」

だってアタランテとかいうアイツの信者、真実を直に見せられてショック受けてた

し。滅茶苦茶可哀想だったぞ。
「はい、教えてください」
「・・・ほんとーにいいんだな?」
「あ、恋愛の話はちょっと・・・」
「そうか!なら話せる事ほとんど無いな!じゃ!」
「待ちなさい!!我慢しますから言ってください!」
「そうかー。まぁ結論から言うとアルテミスって神様は頭お花畑なんだ」
その答えを聞いた彼女の目はきょとんとしていた。まぁ、そうなるわな。
「んで俺の事をダーリンとか言って、事ある事に投げようとするの」
あ、今度は口が開いた。こりゃ相当ショック受けてるなぁ・・・。
「こんな時に言えるのはこのくらいかね」
「・・・」
「まぁ、そのなんだ。傷は深いぞ、がっかりしろ」
そんな言葉を残し、オリオンは消えていった。
「はっ!?」
気がつくと私はマスターの膝で寝ていた。どうやら居なくなった私を探すために街

を回っていると、倒れているのを発見し、介抱していたようだ。
「マスター・・・すいません、こんな夜中にここまでしていただいて・・・」
「大丈夫、気にしてないよ。アルテミスが無事で良かった」
私はいつまでも膝を借りているのも悪いと思い、体を起こした。
・・・夢を見ていたのだろうか。さっきの森は何処にも無く、オリオンと名乗る熊のぬいぐるみも何処にも無い。しかし確かに、あの時のスキルはこの胸の中に刻まれている。
「マスター、少しだけ、私が見ていた夢を聞いていただけますか?」
「構わないよ、話してご覧?」
「では・・・」
彼女は自らの主にこの話を全て伝えた。それは、あの夢を数奇な夢とだけ決め付け、自分の中に収めているのが何となく惜しかったからなのだろう。そして彼女はこう話し、終わらせた。
「熊って、空を飛ぶものなのでしょうか?」
「へぶしっ・・・!はっ!?」
やぁどうも、返ってきたオリべぇです。状況を説明しますと、吊るされてます。えぇ、

未だに。
「あ、ダーリン起きたー？」
「なんで降ろしてくれないの？」
　そしていつのまにかこの人帰ってました。どうせなら空中じゃなくてベッドで目覚めたかったなー！
「いや、寝てるのを邪魔するのは、ねー？」
「まず人を吊るすのはどうかと疑ってくれ」
　ごめんねーとロープを外す。・・・なんか召喚されてからロープの扱いが上手くなったような気がする。
　すると部屋に付けられたベルが鳴る。
「あ、はいはーい」
　扉を開けるとそこに居たのは俺達を召喚したご本人。
「ん？ガウェイン倒しに行くから手伝って？いいよー！」
　まぁ、アルテミス。お前の持ち主はこんな奴だけど、優しいところもあるもんだ。多分そこはお前も、似ているんだろうな。
「ダーリン！行くよー！」
「おう」

ＰＳ　今度会うときは一緒にお茶しましょう

今日の熊は、アルテミスの手でより一層飛んだらしい。

クー・フーリン　ゲイボルグ

朝日が彼女の裸体に降り注ぐ。その暖かさで、彼女は目を覚ます。

「もう・・・朝」

彼女、ゲイボルグの1日は朝の決まった流れで始まる。

まず、いつもの服を着る。いくつか服は有るのだが、それは決して普段着ることは無い。然るべき戦い、自分が出るべき戦いの時にのみその服を纏い、戦場に赴くのだ。

そして服を着てすぐに鏡を見る。これは別に何気なくやっていることでは無い。ただ、朝に鏡を見るという行為に風水的な意味を感じていたからだ。

最後に、くじを一つ引く。くじの色でこの部屋から出る最初の足を決めるのだ。白なら右、黒なら左と。

だが、今日の朝は少し違った。引いたくじは白でも黒でも無く、灰色だった。当然彼女はそんな色をくじに入れた記憶は無い。

「どういうことだ・・・?」

他のキル姫、イタズラ好きなカドゥケウス辺りがやったのだろうかと考えたが、彼女ならこんな地味なイタズラはやらないだろう。彼女がやるならくじの中身を丸々入れ

替えるだろうから。
　そんな事を考えていたら、扉からノックの音が聞こえた。どうやらマスターがやってきたようだ。
「あ、あぁ、出る」
　扉を開き、彼女の主に顔を見せる。
「おはよう。今日の色は?」
　マスターは彼女の事をよく知っている。これはいつもの朝の挨拶なのだ。だが・・・。
「今日は・・・灰色だった・・・」
「灰色?そんなの入れてたの?」
「いや、入れた覚えは無い。あの箱に入れたのは赤と青の2つだけだ」
「寝ている間に・・・ってのは、ゲイボルグにはあり得ないよね」
　そんな2人に近づく影。
「お皿、通りまーす」
　おっとっと、などと呟きながら、この宿の従業員の1人が皿を運んでいた。仕事中だから邪魔してはいけないと、道を開ける。すると。
「ふわっ⁉?」
　木目につまづき、バランスを崩す。その人が持っていた皿の塔は真っ直ぐに彼女のマ

スターへ落ちていく。

「危ないっ！」

ゲイボルグはマスターを部屋の中へ引き入れる。マスターは皿の落下地点から離れ、無傷で済んだ。しかし、手を引っ張られたマスターは驚きのあまり彼女にぶつかってしまった。ゲイボルグは倒れ、頭を強く机に打ち付けた。彼女の意識は離れていく。

「腕が鈍ったかセタンタ？振りの速さが遅いぞ」

「俺が鈍ったんじゃなくてあんたがおかしいんだよ！師匠、あんたいったいどれ程の魔獣を影の国で狩ってきた⊠」

「はて、もう覚えておらぬ」

カルデアのトレーニングルームにて、全身タイツの男女2名が朱槍を用いて戦っていた。勿論殺し合いではなく、実戦を模した腕試し程度の物なのだが・・・。ある1人のサーヴァント曰く、「あれは腕試しじゃなくて、ただの殺し合いだよね？」との事。勿論あの槍に安全策なんてものは無い。そして2人の持つ槍は傷つけたらなかなか治らない、というかもう治らないというか呪いもある、絶望的に腕試しに似合わない代物なのだ。

しかし、だからと言って彼らに現代の槍術で使うような槍を持たせれば、３０秒と持

たずにぶっ壊す。これを投影したエミヤが考えた、アイアスを槍に張っておくという英霊のやる事とは思えない手段を使って守っても、いいとこ3分持つかどうかというとんでもケルト民なのだ。

「ところで、いつまでそこで見ておるつもりだ？私達とまでは言わんが、それなりには運動しておくべきだろう、マスター」

スカサハがそうマスターに尋ねた。ちなみにこの時のマスターはマシュに盾を借りて、もしもの時のために備えていた。

「師匠、マスター震えてるからよ、勘弁してやってくれ」

まぁあんな戦いを見せられれば当然こうもなる。だって現時点で朱槍のカケラがいくつか壁に刺さってるし。

「先輩、お怪我はありませんか！」

みんなの頼れる後輩、マシュ　キリエライトがマスターの元に駆け寄る。

「心配すんなお嬢ちゃん、俺たちも最大限の気遣いはしてたからよ」

「あ・・・すいません！失礼でした、クー・フーリンさんやスカサハさんが先輩を傷つけることなんて無いのに・・・」

「気にするなマシュ。好意を抱いている者に気を使うのは、私達乙女の特権だぞ？」

「え？乙女？師匠がぁ？歳考えろよ」

ゲラゲラと大笑いする青タイツ。だが空気はメチャクチャ、寒かった。
「・・・セタンタよ、言いたい事はそれだけか?」
「え?あっ、しまっ・・・」
「ゲイボルクッ!」
朱槍が、ランサーの胸を貫く。
「ランサーが死んだ!」
「先輩⊠え、えっと・・・このひとでなし!」
「案ずるな2人とも。そのうち戻ってくる」
クー・フーリンはそのまま光と散っていった。

ここは影の国、数多の亡霊が闊歩する土地。そんな中に青いタイツの男が1人。
「ちくしょう、また面倒な事に・・・」
以前とまた同じ光景だった。違うのはマスターがここに居ないこと。これならある程度好き勝手できるし、また城にでも戻ればなんとかなるだろう、まぁすぐに戻れるだろうと思って居た。
まぁ城にはすぐに戻れたのだが・・・。問題はそこからだった。
「・・・誰かいるな」

前回の影の国巡行の時、スカサハが居た立ち位置にはまた別の女性が立って居た。その女性は何故だか、スカサハの面影があった。
「何者だ?」
「ほぉ、俺が見えるって事はアンタは今回の俺の敵って訳でいいんだな?俺の名は…まぁ、ランサーでいい」
クー・フーリンはそう言いながら朱槍を右手に取り出す。
「私と戦うのか・・・ならば、容赦はしないぞ」
「はっ!いいねぇそうこなくっちゃなぁ!」
２人の槍が激突する。

「ふんっ!」
「はぁっ!」
ランサーは焦っていた。
(妙だな・・・この女の戦い方、何処かで・・・)
「考え事をしている暇があるのか?」
「チィッ!」
どうしてもあと一歩届かない。どうしてもあの女が一歩先を行く。守ることはでき

るが、攻めることは出来ない。気になるのだ、彼女の使う槍は全くの別物ではあるが、槍術はそっくりそのままスカサハなのだ。動きどころか声や口調までもが瓜二つ。
「ふむ、その朱槍…成る程。ランサー、貴方の名前を見抜いたぞ」
「ほう、そうかい。ならば言ってみな。正解で俺の槍をプレゼントだ」
彼はこの女に宝具無しでは勝てないと悟った。ならば宝具を使うまで。彼は体勢を低く下げ、発射状態に入る。
「名前は、クー・フーリン、だな?」
「ご名答!では手向けと受け取れ…!」
後ろに跳び上がる。腕に魔力が込められて行く。
「突き穿つ死翔の槍（ゲイボルク）ッ!」
その槍は必中の槍、投擲されれば最後、外れることはない真の意味での必殺技。しかし彼女は口角を上げ、つまり…笑っていた。
飛んで行く槍はまるで赤い光線のようなスピードで彼女に迫る。そのまま彼女へ直撃、粉塵が舞い上がる。
クー・フーリンには疑問があった。何故だ?何故笑っていた?避けないのはわかる。避けられないと諦めたのか?しかしあの笑い方は自嘲の笑いではなかった。
粉塵が晴れる。見えたのは地面に突き刺さったゲイボルクと、無傷のままの彼女で

あった。
「直撃したよな?」
「まぁ、直撃コースではあったな。しかし、今の私はどうやら不確かな存在らしい。ほら、見てみるがいい」
　自らの槍の矛先を自分の胸に向ける。それは彼にはよく見た…というか、悪夢のような光景。
「おい待て!何し・・・!」
「えい」
　ドスッと、身体を槍が貫いた。一瞬の静かな間。確かに、背中から矛先が見えていた。だが、まったく血は出ていない。
「どうなってんだ?」
　彼女はピンピンしている。それどころか抜いたり差したりしている。
「どうやらすり抜けてるようだ。おそらく今の私に実体は無いんだろうな」
　槍を抜き、矛先を下ろす。
「まぁこれくらいが良き所か。時間切れだな」
　彼女の身体からほのかに黒い煙が漂い始める。
「待て、お前結局何者だ?変なヤツを相手取るのは何もおもわねぇが、影の国となると話

は別だ」
「私か？私の名前は、ゲイボルグ。よく知る名だろう？」
「は？お前が、ゲイボルクだと？っておい、まだ話は！」
「ではな、私の持ち主（マスター）。いつかまた、会えることもあるだろう」
「待て！戦いも話もまだ終わって・・・！」
　腕を掴もうとしたのだが。
「えい」
「ぐふっ！」
　また、ランサーが死んだのだった。

　目を覚ますと、そこは自分の起きたベッドの上。そうだった、あの時頭をぶつけていたのだった。
「大丈夫ですか？すいません、私の所為で頭を・・・」
「いや、大丈夫だ。逆にありがとう。どうやら君のおかげで面白い夢を見れた」
「え？は、はぁ・・・」
「さて、ではあの力を再現してみるかな」

カルデアにて。

「色々と酷い目にあった・・・」

彼は自分の部屋の寝床で目覚めた。二度の死を乗り越え、影の国より戻ってきたのだ。スカサハ曰く、ノーヒントでよく帰ってこれたな、さすがは私の弟子だ、と。・・・死が影の国から帰ってくる方法の一つとか、師匠まじ鬼畜だわ。

で、まぁ気になることがあるんだが、どうやら人理修復を終わらせてから、サーヴァントの中で俺みたく夢の中・・・いや、俺の場合は夢じゃなかったが、どうやら何かきな臭い物を感じる。

「花の魔術師、いるか?」

「おや、光の御子が私に何かようかい?」

この白髪の胡散臭い、ともすれば詐欺師とも勘違いされてもおかしくないこの魔術師の名はマーリン。グランド・・・とかの話は割愛するが、まぁとんでも魔術師だと思えばそれでいいのだろう。

「少し聞きたいことがある。夢の話だ」

「おやおや、ケルトの有名な英雄が、この僕に夢を話すのかい?」

「いいや、これは俺だけの話じゃねぇ。オリオンにあのセイバー、そんでランスロットの野郎にも共通する話だ」

セイバーの名前が出たからだろうか、彼の目は真剣な眼差しに変わる。
「聞こうか。何があったんだい？」
俺はセイバーやオリオンから聞いていた。夢の中で出会った、自分もしくは近親の者が持つ武器の名を冠するうら若き女性達。そしてその中で出てきたいくつかの謎の単語、キル姫とキラーズ。それらの事をマーリンに伝えた。
「ふむ・・・キラーズに、キル姫ねぇ・・・」
「少し気がかりでな。夢ならアンタが精通してるんだろう？」
「まぁそうだけど、今回の件については僕に言えることは無いよ。仮に予測を立てるとするなら・・・そうだね。修復が行われたパラレルワールドにおいて、それを行ったのが僕達サーヴァントではなくキル姫、という存在だった。そして同じ名を持つモノが今、特異点に残った聖杯の力の残滓によって同じ場所に呼び起こされる奇跡、と考えれば、納得もいくんじゃない？」
僕もわからないからどうとも言えないけどねーと言い残し、マーリンは何処かへ歩き去っていく。
「ふーん」
俺はその言葉に頷くことしか出来なかった。

エミヤ　ティルフィング

朝の5時、彼は目覚め、ある場所へと向かう。

さて、では今日も仕事を始めるか。と食堂の扉を開く。そして、朝食の準備を始めるためにキッチンに向かうと、そこに倒れている者が一人。

「君、大丈夫かね!?」

急いで駆け寄り、身体を揺らすとゆっくりと目を開けた。

「・・・あれ?」

美しい桃色をした長髪の女性。鎧らしき物を着ているから、最近カルデアに召喚された英霊なのだろう。身体を起こし、エミヤを見る。

「何処か怪我している場所は?」

ここは刃物を置いてある場所だ。何かの拍子に転んで怪我するということも滅多な事ではない。

「いえ、大丈夫です・・・」

見慣れぬ場所で不安なのだろうか。

「で、君はどうしてここにいるのかね?ここの鍵を持っているのは私とあと数人なのだ

が」
「えっと…突然隊の皆とはぐれてしまって、途方に暮れてたら突然扉が見えたんです。夜も更けていたので取り敢えずそこで休もうと思っていたのですが…」
　まるで別世界から来たような口振り。おそらく初の英霊としての召喚で少々混乱しているのだろうか。
「まぁ、一旦落ち着きたま…」
　グー
「…」
　今のは私の音ではなかった。目の前で顔を真っ赤に染めている。
「すぐに食事を作るから、何処か座っていてくれ」
「あの、よろしいのですか?」
「本来なら開店準備中だが、お腹が減っているのにあと2時間待てと言うのは酷だろう?」
「あ、ありがとうございます!」
　彼女がキッチンを出て、食堂の席へ向かうのを見届けた後、コンロに火を入れる。彼女はかなりお腹が空いているのだろう。何か手早く作れるものが良い。そこで思いついたのは焼きそばだった。

「確か袋麺がいくつかあったな」
冷蔵庫から袋麺、肉、キャベツと玉ねぎを取り出す…っと、危ない。キッチンから出て、あることを訪ねる。
「なぁ君、何か苦手なものはあるかね？」
「いえ、大丈夫です。なんでも食べられます」
「そうか」
また調理にもどる。
フライパンに火をかけ熱を入れる。それと同時に野菜と肉をざく切りにしていく。ちなみにこの肉は猪のものだ。何処で取れたかは、言う必要は無いだろう？
十分に火を入れたあと、油をひく。袋麺はそのまま入れるとほぐれにくい場合があるのでザルに入れて水で一旦ほぐす。肉と野菜をフライパンに入れ炒める。
数分して、肉の色が変わり野菜がしなやかにやったら麺を投入。なるべく麺に熱がいくように野菜と肉を麺の上に。麺にある程度熱が入ればかき混ぜる。ここで注意したいのは焦げ付いていないことだ。少しの焦げ付きならば気にすることは無いのだが、範囲が広いとソースを絡ませにくくなる時がある。そうなった時はまず焦げ付きを外してから、ソースをかけてほしい。
ソースをかけ、どんどん麺と具材に絡ませていく。それが終われば完成だ。

皿に盛り付け、彼女の前に置く。
「召し上がれ」
「いただきます」
手を合わせ、その言葉を言うと、まずは一口と麺をほおばった。
「どうかな？」
「美味しいです！」
彼女の緊張していた顔が一気に砕ける。よかった、お気に召したようだ。
「おかわりならまだある。君の為に作ったから遠慮無く食べたまえ」
「はい！」
ピンクの髪を揺らしながら麺を啜る彼女。このぶんだとおかわりを用意した方がいいな、ともう一つの皿を棚から出し、盛り付けておく。
「おかわりお願いします！」
「はいよ、お待ちどうさん」
空の食器を受け取り、すぐさま次の皿を渡す。少々恥ずかしそうだったが、どうやら食欲には勝てないようだ。
「食事中ですまないが、君の名前を知らないんだ。聞いてもいいかな？」
「私はティルフィングと申します。あの、貴方は？」

「エミヤだ。クラスはアーチャー。情けない話だがマスターからは料理長だのオカンだの言われているよ」
　何故か彼女に自分の事を話した。ティルフィングと名乗る彼女は静かに笑っていた。
　しばらくして、彼女は全ての焼きそばを食べ切った。
「あの、ありがとうございました」
「どういたしまして」
「でも、私何も持っていません。あんなに美味しい食事をさせてくれたのに、どうお礼をすればいいのか・・・」
「構わんさ。強いて言うなら君の笑顔が一番の報酬だ。さぁ、厄介な腹ペコ連中に焼きそばの臭いを嗅ぎ付けられる前に戻りたまえ」
「では私はこれで失礼します。本当にありがとうございました!」
　彼女はそう言って出て行った。
　エミヤは考える。ティルフィングか…本当に何の名前だったかな…。と、その時、食堂にある人物がやって来た。
「よおアーチャー、焼きそばでも作ってたのか?俺にもくれ」
「ランサー、少し聞きたい事がある」
「・・・何だ、お前が俺に何かを聞くなんて珍しいねぇ。今日は剣でも降るんじゃないの

か?」
冗談を無視して話を続ける。
「ティルフィングという名前に覚えはあるか?」
「ティルフィング?・・・ティルフィングて言ったらルーンの刻まれた魔剣だな。それがどうしたんだ?」
「なぁランサー。君はいつか、一度自分の槍の名を持つ女性と出会ったと言っていたな?」
「あぁ、そうだが・・・お前まさか」
「この焼きそばはそのティルフィング嬢の為に作ったものでな。どうやらついに英霊として呼ばれたらしい。・・・カルデアの召喚システムはよく分からんな」
「そうなのか。・・・ん?ちょっと待て、じゃあそのティルフィングっていうのはどこへ行ったんだ?俺がここに来た時は誰にも会わなかったぞ」
「・・・何だと?」
この食堂は少し奥まった場所にある。ここに来るもの同士が絶対に顔を合わせられるようになっているのだ。お互いの顔を見て、健康状況を確認する為にロマンが考えたものらしい。
「本当に見なかったのか?」

「あぁ。もしかして夢だったんじゃねぇの？俺もセイバーも夢みたいな出来事だったし」
「いや、しかし・・・」
「おや、ランサーにアーチャー。焼きそばでも作っていたのですか？私にも一皿お願いします」
「おいアーチャー、私にもこいつと同じ物をよこせ」
「私にもお願いします♪」
　やって来たのは青黒白の騎士王達。
「・・・じゃあなアーチャー、また飯の時間に戻ってくるわ」
「おい、待てランサー！・・・ええぃ逃げ足の速い！」
　ランサーはそそくさと帰っていった。そして腹ペコ三人娘はまだかまだかと待ちわびている。
「・・・別に一人でやりきってもかまわんのだろう？」
　頼れる背中がキラリと光る。
　増援のブーディカとタマモキャットが到着する頃には腱鞘炎になっているのであった。